

融合することばと音楽

知的障害児・者の音楽的活動の場に見られる対話の芽生え

企画	有働真理子	(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)
話題提供	有働真理子	(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)
	沼田里衣	(神戸大学国際文化学研究科)
	梅谷浩子	(兵庫県音楽療法士会)
指定討論	高野美由紀	(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)
	原真理子	(Hedmark University College, Norway)

[企画主旨]

音楽的な要因が関わって知的障害児・者との対話交換が成立したと実感できることは少なくない。歌や言語表現の中の音楽性が対話を促す過程や、演奏を通して音楽を共有することで生まれる対話のあり方など、対話促進と音楽の関わりについての興味は尽きない。このセッションでは、即興音楽及び音楽療法の活動実践に見られる対話発生現象の事例を通して、ことばと音楽の関係を観察しながら、知的障害児・者への対話促進支援の手がかりや、QOLに資する対話環境について考察したい。有働は言語学の視点、沼田は即興音楽活動、梅谷は音楽療法実践から、それぞれ話題を提供し、特別支援教育（高野）及び海外（欧州）の音楽療法（原）の意見を得て、参加者との議論・対話を展開したい。

[発表内容]

有働真理子：ことばと音楽の混淆が促す対話活性化の事例

知的障害児・者は、認知・言語能力と社会性の発達を緩やかなペースでシンクロさせながら歳を重ねて行く。特別支援学校卒業後の長い人生のQOL向上のためには、対話環境整備が非常に重要な意味を持つ。中でも言語獲得と親和性が高い音楽は特に重要である。ここでは、音楽活動における‘歌的な’対話交換が生じていると思われる現象を取り上げ、ことばと音楽の混淆が対話行動を活性化し、そのことで自尊感情が育ち、周囲とのより豊かな人間関係の構築が促される状況について考察する。

沼田里衣：コミュニティ音楽活動における音楽的対話：多様な価値観の交換の場

即興演奏を行なう音楽コミュニティにおいて、その音楽がコミュニティ形成に作用する機能に焦点を当て、関係性が構築される過程を考察する。

発表者は、2005年より新しい音楽の地平を開拓することを目的とした即興音楽コミュニティ「音遊びの会」を企画・運営している。メンバーは知的障害者とその保護者、音楽家やダンサーなどのアーティストと音楽療法家で、月二回の継続したワークショップと年数回の公演活動を続けている。治療・教育的目標は掲げていないが、会の活動の継続的な観察と参加者への個別のインタビューより、自発性や表現の新鮮さを求めるという即興演奏の機能が、良好な関係性の構築と拡張につながっている様子を観察することができた。即興演奏をより楽しみたいという参加者の動機が、互いに多様な価値観を受け入れる場を成立させていると考えられる。

本発表においては、コミュニティ音楽療法、即興音楽や障害学の議論を参照し、知的障害児・者と音楽家の間に様々な音楽的対話が生まれ、その活動が社会的認知につながる過程について、領域横断的な観点から論じる。

梅谷浩子：問題行動の軽減を目指した音楽的対話の可能性

自閉症児・者と向き合う時、音楽療法士は、様々なコミュニケーションの糸口を迫り、心と心が通い合う瞬間を常に探している。音楽の持つ力と五感を駆使して、音楽的対話を試み、彼らの心の内に迫ろうとしている。音楽的対話のための手法は、使用音楽、使用楽器、対人関係など、様々な組み合わせや、関係性の中での影響や相乗効果などを考慮して、臨機応変に調整されて行く。その上で、対話の可能性の可否を分析し、その時々での解決すべき課題に繋げていくことが、音楽療法士の担う役割であると認識する。音楽的対話を通して問題行動の軽減を目指した事例を紹介し、人が生きていくための喜びや意味を、音との対話の中で生み出していく営みについて語る。